

2050年からの メッセージ

福田 正博

サッカーというスポーツが
世界をつなぐ未来を創るために。

現役時代は、自分に与えられた課題のことで頭がいっぱいで、戦術面のこともそれほど理解できていなかった。引退して指導者の立場になって、分かったことは多いんです。

日本のサッカーが世界レベルに追いつくためには、決定力が足りないといわれます。その理由として、選手個々のパワー不足が指摘されるのも確かです。ですが、国内スポーツ環境の再整備も見逃せないと思うんです。

例えば日本では、プロ・リーグを除いてアマチュアスポーツ大会のほとんどがトーナメント形式で争われます。この戦い方では、負ければ次の試合のチャンスはない。リーグ戦のように、負けた試合の反省点を次の試合に活かすという余裕がないため、チームの課題を練習と試合の中でフィードバックすることが難しくなるのです。一般社会でも同じですが、悪かった点を修正して次の仕事に活かすからこそ成果が得られるはず。そこに、トーナメント形式主体の弊害がある。

サッカーでいうなら、トーナメントのカップ戦では、試合中でのパフォーマンスが重要視されて派手な個人技がもてはやされがち。その一方で、リーグ戦の長丁場を戦い抜くチーム力が正確に評価されにくいという傾向があるんじゃないか。サッカー先進国と日本の違いは、そうした「環境の違い」に根差しているように思えるんです。

実際、こうした環境の整備に向け、日本サッカー協会も、小中高や大学とクラブ組織とをうまく融合させながら、リーグ戦形式を広く導入する方向を模索しています。ただ、その改革は一朝一夕にはいきません。ヨーロッパの場合はクラブ組織主体のサッカーを脈々と100年以上もやってきた土壌があり、国民の多くが同じようなサッカー観をもっています。ですが、日本ではそれがまだ、Jリーグの誕生で始まったばかりと言っているわけです。

欧州や南米、サッカー先進国にはそれぞれのお国柄がありますが、それはその国のサポーターがどういうサッカーを望み、どんなスタイルをよしとするかという、成熟したサッカー観を反映している。それが、その国固有の「サッカー文化」なんです。日本でも一日も早く、日本独自の「サッカー文化」を創り上げたい。社会や生活の隅々にまでサッカーを浸透させられれば、それも可能でしょう。

かつて中東を訪れた際、ビーチサッカーで地元の子どもたちとボールを蹴り合った楽しさが忘れられません。世界のサッカー人口は、ほかのどのスポーツより多いといわれます。それは道具がいらず、ボールひとつで喜びを分かち合える素晴らしいスポーツだからです。

サッカーというスポーツが世界をつなぐ未来を創るため、少しでも貢献できれば、僕にとってそれ以上に幸せなことはありません。(談)

ふくだ・まさひろ

1966年、神奈川県生まれ。中央大学卒業後、89年に三菱(現浦和)に入団。日本人初のJリーグ得点王、Jリーグ通算で93得点(228試合)、日本代表では9ゴール(45試合)を記録。ミスターレッズとして、ファンを魅了しつづけた。2002年に現役引退。サッカー普及活動や評論活動を経て、浦和レッドダイヤモンズコーチ。



CONTENTS

- 03 2050年からのメッセージ 福田 正博
- 04 NEW & OLD
特集 時代とともに歩んできた、ヒートポンプ
- 12 江戸のテクノロジー 其の八 日本地図
- 14 社会科見学の時間です 原子力発電所
- 18 MHIワールドプロジェクト メキシコ
- 20 News & Topics
- 23 地球と地域とMHI